貴志川線存続とその活用による地域活性化

和歌山市民アクティブネットワーク交通まちづくり分科会　会　長　　辻本　勝久
○副会長　　伊藤　雅
事務局長　糀谷　昭治

1．活動方針・目的

貴志川線の存続と存続後の貴志川線及び貴志川線沿線地域の活性化

2．活動内容

平成15年10月南海電鉄が貴志川線事業廃止の意向を表明、翌年9月には事業廃止届を提出した。貴志川線存続を願う住民は、「貴志川線の未来を"つくる"会」などを中心に、「貴志川線存続の意義」等を学習し、ワークショップ・シンポジウム・幟・チラシなどで広く沿線住民に訴え続け、会員数は6,392名に達した。また、「和歌山市民アクティブネットワーク（WCAN）」が貴志川線並行道路の交通量等を調査して、「貴志川線存続に向けた市民報告～費用効果分析と再生プラン～」を平成17年1月に公表した。これら「貴志川線は地域で責任をもって支える」ことを種々の行動で示したことにより、NHK番組にも取り上げられ、貴志川線は存続することとなった。

存続後は、和歌山電鐵の貴志川線運営委員会に参加して種々活性化施策の提案、貴志川線への乗客数増加を目的にしたモビリティマネジメントの実施及びイベント・駅及び沿線の美化など全面的な協力を官民一体となって行っている。このような活動で貴志川線を活性化することにより、沿線地域の活性化と道路負荷の低減による視点を変えた「未知普請」に取り組んでいるところである。

3．今後の課題等

地方鉄道沿線の活性化のためにも、また地球温暖化防止のためにも、自家用車から鉄道など公共交通利用への転換による公共交通の再生が喫緊の課題となっている。このためには、基本方針の明確化とそれに基づいた細かい施策を含めた「実行の積み上げ」が何にもまして必要である。

貴志川線の活性化を活動の場として、「産官学民の協働」で「実行の積み上げ」を確実に行って、その効果が目に見えるようなレベルまで高めることが大きな課題である。

＊今後の地域づくりに向けどのような事項に配慮すべきか、取り組むべきか。

貴志川線のような「産官学民の協働」が行える他の事業を一つずつ積み上げていくことが必要である。日本風景街道（シーニック・バイウェイ）事業は実態的にそのような事業の一つにすべきである。

「第2回関西元気な地域づくり発表会」(平成19年2月16日)

貴志川線存続とその活用による地域活性化

和歌山市民アクティブネットワーク　伊藤　雅

貴志川線(和歌山ー貴志間)

路線の概要(2003年度実績)

駅数・営業キロ	14駅　14.3km
年間輸送人員	199万人 (5438人/日)
列車運転本数	平日96本/日　休日78本/日
経常赤字	約5.4億円
営業係数	262 (収入100円に対し支出262円)
鉄道要員	42人
固定資産	土地　6億5800万円 (H16末) 駅舎等 15億3400万円 (H16末)

貴志川線の存廃問題の経緯

＜廃線問題の発端＞

2003年11月21日

- 南海電鉄:貴志川線廃止方針の表明

2003年12月6日

- 和歌山市・貴志川町:対策協議会を設置
- 利用状況調査(04年2月), 署名活動(04年3月末に約26万人分)等を実施

2004年8月11日

- 南海電鉄:貴志川線廃止を正式発表

→行政主導の南海への「存続お願い運動」では状況に変化が起きなかった

＜当初の住民側の動き＞

2003年11月22日

- 「南海貴志川線応援勝手連」がWeb上で貴志川線廃線問題に関する情報提供を開始

2004年2月22日

- 貴志川の水と環境をまもる会主催シンポジウム(基調講演:和大・辻本助教授→提案型・行動型住民活動の必要性提示)

2004年4月12日

- 和歌山市会議員研修会(伊藤による講演→貴志川線存続の選択肢として「分社化」「新会社の公募」「三セク化」を提示)

2004年4月～5月

- 「南海貴志川線応援勝手連」主催の住民ワークショップを4回開催

→ 住民の関心は薄く参加者数十名にとどまる

貴志川線の存廃問題の経緯

＜住民の盛り上がり＞

2004年8月

- 住民団体「貴志川線の未来をつくる会」結成，会員数が6350名にまで拡大

2004年9月8日

- 市・町主催「貴志川線存続に向けてのシンポジウム」，600名参加

2004年10月3日

- つくる会勉強会：「貴志川線の存続のために」，200名参加

2004年12月11日

- つくる会主催「住民フォーラム」，800名参加

＜しかし、廃止への準備は進行＞

2004年9月30日

- 南海電鉄：貴志川線事業廃止届を提出

2004年11月22日

- 和歌山市長：収支シミュレーションの実施結果を発表．引継事業者の公募に言及するも，行政負担は困難との見方を示す．

2004年11月29日

- 近畿運輸局：貴志川線廃止に関する意見聴取会を実施

2004年末～2005年始

- 南海電鉄：サイクルトレイン試行，初詣フリーきっぷ発売

貴志川線の存廃問題の経緯

＜専門家集団も頑張る＞

2004年9月21日

- WCAN（和歌山市民アクティブネットワーク）に「貴志川線分科会」（会長：和大・辻本助教授）を設置
- 「日立電鉄線存続に向けた市民報告書」の貴志川線版の作成に着手

2004年11月

- 応援勝手連主催の「駅評価ワークショップ」を支援
- 貴志川線並行道路の交通量調査を実施

2005年1月22日

- 貴志川線存続住民会議の開催：交通系・環境系の諸団体が一同に会して各団体の協力体制を確認
- 「貴志川線存続に向けた市民報告書」公表

＜存続の決定＞

2005年2月4日

- 県・市・町による支援スキームの発表

2005年2月23日～3月22日

- 鉄道事業者の公募

2005年4月28日

- 後継事業者が「岡山電気軌道」に内定

2005年6月9日

- 南海電鉄：貴志川線撤退を05年9月末から06年3月末に延長

2005年6月27日

- 後継事業者が「和歌山電鐵株式会社」を設立

2006年4月1日

- 「わかやま電鉄貴志川線」として運行開始

貴志川線の存続

＜存続の決め手＞

- 住民運動の盛り上がり→つくる会の圧倒的な動員力、TV番組の力、住民連絡会議の開催
- 存続のための理論武装、てこ入れ→WCANによる報告書、岡電へのラブレター
- 行政の決断→支援スキームの立案と事業者の公募
- 事業者の協力→南海電鉄から和歌山電鐵への引き継ぎ

＜存続の効果＞

- イベントの実施
- 新車両の導入
- ダイヤ改正
- 駅の改装　等

→和電が、住民の要望や提言に対して、できることは本当に早く、真摯に実行

→乗客数が前年比10%増

→住民の信頼を得る鉄道へ脱皮

貴志川線を取り巻く「産官学民」の協働

＜和歌山電鐵＞

- 「運営委員会」→地元の意見を吸収するため，市民団体を中心とした行政・有識者・沿線の学校関係者等による委員会を組織

＜市民団体（つくる会）＞

- イベントの実施、駅および沿線の美化活動

＜市民団体（WCAN）＞

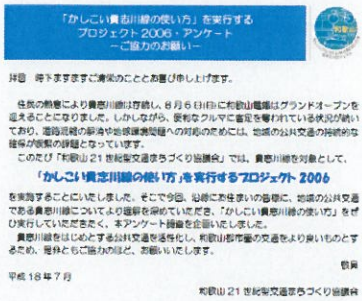
- 公共交通活性化プログラムの提案→交通マップ作成、モビリティ・マネジメントの実施

＜行政等＞

- 「和歌山21世紀型交通まちづくり協議会」の設置→公共交通活性化のための行政・事業者・経済団体・市民の連絡組織

WCANの発案による公共交通活性化プログラム「和歌山21世紀型交通まちづくりプログラム」

協議会の開催



「かしこい貴志川線の使い方」を実行する
プロジェクト2006・アンケート
～ご協力のお願い～

拝啓　時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

住民の熱意により貴志川線は存続し、6月6日(日)に和歌山電鐵はグランドオープンを迎えることになりました。しかしながら、便利なクルマに重宝を奪われている状況が続いており、道路混雑の解消や地球環境問題への対応のためには、地域の公共交通の持続的な確保が喫緊の課題となっています。

このたび「和歌山21世紀型交通まちづくり協議会」では、貴志川線を対象として、

「かしこい貴志川線の使い方」を実行するプロジェクト2006

を実施することにいたしました。そこで今回、沿線にお住まいの各様に、地域の公共交通である貴志川線についてより理解を深めていただき、「かしこい貴志川線の使い方」をぜひ実行していただきたく、本アンケート調査を企画いたしました。

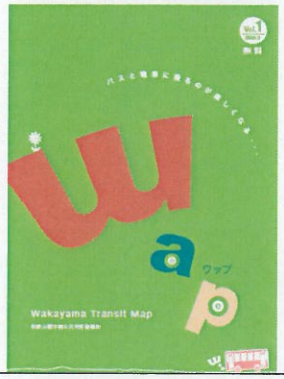
貴志川線をはじめとする公共交通を活性化し、和歌山都市圏の交通をより良いものとするため、是非ともご協力の程ご、お願いいたします。

敬具

平成18年7月

和歌山21世紀型交通まちづくり協議会

貴志川線沿線モビリティ・マネジメントの実施



公共交通
マップの作成

事業所向け
モビリティ・
マネジメント
の実施

貴志川線を活用した地域活性化に向けて

- 貴志川線の存廃問題を契機として公共交通の存続のための合意形成がなされた（市民・行政・事業者の役割の認識）
- 公共交通利用促進のための事業が1つ1つ積み上げられてきている
- 地域の活性化につながる事業は…まだまだこれからである（例えば、鉄道沿線への土地利用の誘導、沿線地域への観光客の誘客など）

- 日本風景街道（シーニック・バイウェイ）のコンセプトと相通じる点がある

- 地域のための（鉄）道づくり
- （鉄）道を活用した地域の活性化

- （鉄）道の持つ力を活かすために、「産官学民の協働」による事業を1つ1つ積み上げていくべき